

鳥羽のゆかりの人物



明治の世になって、鳥羽の教育のためにつくした人に、

近藤真琴^{こんどう まこと}や門野幾之進^{かどの いくの しん}がいます。

また三島由紀夫^{みしま ゆきお}をはじめ、鳥羽の美しい風景や

海辺の暮らし^{しょうかい}を紹介した文学者もいます。





もくじ

- | | | | | |
|----------|----------|----------|----------|----------|
| 68 近藤真琴 | 72 伊良子清白 | 75 藤原豊吉 | 77 岩田準一 | 79 三島由紀夫 |
| 70 門野幾之進 | 74 石原円吉 | 76 江戸川乱歩 | 78 梶井基次郎 | |



鳥羽商船高専の前身を創立した

近藤 真琴 (1831~1886)

鳥羽市の北西部・池上町に、「鳥羽商船」とよばれている国立鳥羽商船高等専門学校があります。道路をへだてて広がる入り江には、練習船「鳥羽丸」が浮かんでいます。創立以来、商船や大型客船などの船長や機関士を多く養成してきた学校です。

この学校を創立したのは、明治時代のすぐれた教育者のひとり、近藤真琴という鳥羽ゆかりの人で、1881（明治14）年のことです。

真琴は、江戸時代も終わりに近づいたころ、鳥羽藩に仕える武士の子として江戸で生まれました。黒船来航さわぎの幕末に、いち早くオランダ語や西洋の航海術などを学び、明治時代になると、「日本がこれから発展するには、人や貨物を輸送する商船をさかんにして、自国の船で外国と取引きすることが大切だ。」「そのためには、優秀な船員を育てることが欠かせない。」



近藤真琴百周年記念館。



鳥羽商船の創立者・近藤真琴。



代々の校長の写真や資料が展示されている記念館内部。

1911(明治44)年
に建てられたころの
商船の建物。



と考えました。

そして、郷里の鳥羽に「鳥羽商船こうせん」
を開いたのです。鳥羽は天然の良港
で、船の訓練にも適てきしているので、鳥
羽の子どもたちの将来のために、船員
を養成する学校を役立てたいと考えた
のでした。

また、東京には「攻玉社こうぎょしゃ」という学
校も開きました。ここからは、たくさ
んの人材が育ち、のちに総理大臣にな
った鈴木貫太郎すずき かんたろうもその一人です。

真琴は、その後も、海に親しむ鳥羽
の若者の教育がさかんになるようにと
願い、学校に寄付金をおくってきまし
た。そういう真琴を尊敬した鳥羽の人
たちの募金によって、真琴の功績を広
く知らせるための記念碑が建てられ、
現在も鳥羽商船の校門付近に残されて
います。

鳥羽商船の初代校長は
真琴だったんだね!



海に面した校舎の全景(鳥羽市池上町1-1)。



練習船の鳥羽丸。



真琴の功績を刻んだ記念碑。

保険のしくみと

しょうがく し きん だん たい

鳥羽の奨学資金団体をつくった

か どの い く の し ん

門野 幾之進

(1856～1938)

門野幾之進は明治維新の10年ほど前の1856年に、鳥羽藩の家老の家に生まれました。西洋の進んだ学問を学ぶことが大事だと考えていた父のすすめにより、13歳で東京に出て、福沢諭吉(1835-1901)が開いた慶応義塾に入学します。

幾之進は人一倍の努力をして、わずか2年後に15歳で英語の教師になり、「ボーイ教師」といわれて、みんなから親しまれました。

その後、幾之進は30年以上も教師を続け、慶応義塾を代表する学者として、活やくしました。諭吉から信頼され、慶応義塾を日本で初めての私立大学

とする仕事にたずさわり、民間の立場から学問と教育の発展につくしたのです。

諭吉が亡くなった後、幾之進は教師を辞めて実業家になります。1904(明治37)年、千代田生命保険を創業したのははじめ、多くの保険会社や銀行などを次々に創立し、実業界で活やくしました。

諭吉は生前、生命保険事業を「人の生涯を請け合う大切な仕事」と考えていました。それを受けついだ幾之進は、利益を得ることを目的とせず、人生に起こる予想ができない災害も責任をもって引き受ける「保険」という仕



ボーイ教師といわれたころの幾之進。



教育者・実業家の門野幾之進。



記念館には幾之進の生涯と功績が展示されています。

組みを、日本に広めることに大きく貢献しました。

教育者であった幾之進は、子ども時代をすごした鳥羽の教育にも深い関心をよせました。本をおくったり、学費をえんじょする奨学金制度をつくって郷里の子どもたちの教育につくしました。幾之進がつくった奨学資金団体は、「霽溪奨学会」という名前で、今も受けつがれて鳥羽の教育に役立っています。

鳥羽駅から歩いて3分ほどのところに、「門野幾之進記念館」（鳥羽歴史文化ガイドセンター）があります。2階の展示室には、刀や鎧などの門野家に伝わる武具をはじめ、数多くのゆかりの品が展示され、幾之進の少年時代から、りっぱな実業家になるまでの歩みを知ることができます。

幾之進は、福沢諭吉の考えを世の中に実現したんだね。



門野幾之進記念館（鳥羽市鳥羽1丁目10-48）。となりの生家あとには、生誕地碑が建っています。



47歳の福沢諭吉。



実業家になったころの幾之進。



慶応義塾の教師たちと卒業生。福沢諭吉（前列中央）、幾之進（前列右から2人目）。

校医をつとめながら 文学活動を指導した 伊良子 清白 (1877~1946)

伊良子清白（本名：暉造）は1877（明治10）年、鳥取県に生まれました。京都府立医学校を卒業して医師になり、病院につとめながら詩を書き、29歳のとき『孔雀船』という詩集を出しました。ひびきのよい、すぐれた詩が18編のせられていて、評判になりました。

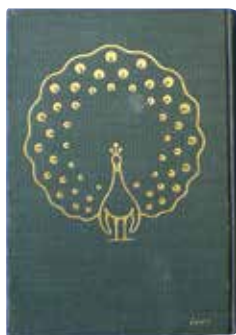
その後、清白は各地に移り住みましたが、1922（大正11）年、45歳のとき、鳥羽の小浜（今の小浜町）に来て診療所を開きました。ていねいな診察でたいへんよろこばれ、当時の小浜小学校の校医もつとめました。医

師としていそがしく働くかたわら、詩作や、短歌雑誌『白鳥』の活動にも関わるなど、文学活動もつづけました。

清白は、海に近い小浜の家に23年間住み、1945（昭和20）年に度会郡七保村（今の太田町）に移りましたが、よく年、往診のとちゅうにたおれて亡



小浜の港の風景。



詩集『孔雀船』。



医師・詩人の伊良子清白（2列目左）。



記念館「伊良子清白の家」(鳥羽市鳥羽1丁目9-9)。

くなりました。

小浜の岬にある旧八幡神社(城山)の境内には、『孔雀船』の中の有名な詩「安乗の稚児」の一節をきざんだ詩碑が建てられています。

鳥羽駅から東側の大鳥居をくぐってしばらく歩くと、赤福鳥羽店のとなりに、「漂泊の詩人 伊良子清白の家」という記念館があります。かつては小浜にあった、診療所と自宅をかねた建物を移築したもので、入り口から続く板べいに、清白がくらしした土地や作品がパネルで紹介されています。診察室や手術室を復元した2階建ての建物の中は自由に見学でき、タッチパネルで映像を見ながら説明を聞くこともできます。



1階の診察室。



2階の客間と子ども部屋。

小浜に長く住んだ清白は、海がすきだったのかな？



小浜の清白の家のあとには石碑が建っています。



小浜の旧八幡神社にある「安乗の稚児」の詩碑。



志摩の水産資源保護や観光につくした

石原 円吉 (1877~1973)

鳥羽駅からバスで35分、パールロードぞいの浦村町に、「鳥羽市立海の博物館」があります。海女の道具や漁船、祭り行事をはじめ、鳥羽志摩の海辺のくらしが分かるたくさんの展示が見られます。石原円吉は、1971（昭和46）年にこの博物館を開館した初代の館長です。

円吉は1877（明治10）年、志摩町和具（今の志摩市志摩町和具）に生まれました。若くして水産業に取り組むとともに、ヨード製造会社やかんづめ工場などのはば広い事業をおこします。

1922（大正11）年には三重県議会議員となり、水産業の発展や漁港の整備につくしました。さらに戦後には衆議院議員になり、これからの日本には「沿岸

漁業をさかんにすること」、「海の資源を保護すること」が必要だと力説して、法律の成立に全力をかたむけたのでした。

円吉は観光にも力をつくしました。伊勢志摩が戦後初の国立公園になると、15年間に1万本近くのサクラの苗木を伊勢志摩の小中学校におくりました。それは、のちに「円吉ざくら」と呼ばれて、地域のお花見どころとして親しまれました。



水産業につくした石原円吉。



開館当初、鳥羽1丁目にあったころの「海の博物館」。



昭和天皇に漁具などを説明する円吉(1951年)。

民間として初めて深海潜水艇を開発した

ふじわら とよきち
藤原 豊吉

(1892～1981)

鳥羽市立海の博物館の展示物の一つに、クジラ型をした本物の潜水艇「白鯨号」があります。はしごを上って中に入れるので、子どもたちに大人気です。藤原豊吉は、民間で初めての潜水艇を開発し、危険な深い海底での作業を安全なものにしました。



潜水艇の白鯨号。(海の博物館展示)

豊吉は1892(明治25)年、神島に生まれました。まわりの伊良湖水道は、潮の流れが速いうえ、海中にかくれて見えない岩が多く、よく船が遭難しました。海の男として育ち、漁業や海運業に従事して何度もおそろしい目に会った豊吉は、海難救助と港の海底土木作業を



潜水艇の東海号。(海の博物館展示)

仕事にしようと、25歳の時、潜水作業を行う会社をおこします。

戦後は「東海サルベージ」という会社をつくって、船に乗せて運べる



潜水艇開発者・藤原豊吉。

潜水調査機の東海号を開発し、続いて1958(昭和33)年には白鯨号を完成させました。白鯨号は海底を自力で移動でき、青函トンネルや明石海峡大橋の建設などで活やくをしました。

国内ばかりでなく東南アジアやアフリカ、旧ソ連(今のロシアなど)にまでも、潜水調査に出かけていったのです。

白鯨号は、どのくらいの深さまでもぐれるのかな?



鳥羽ゆかりの推理小説を残している

江戸川 乱歩 (1894~1965)

明治の末から昭和の初めにかけて、今の鳥羽水族館のあたりに鳥羽造船所の大きな工場がありました。江戸川乱歩（本名：平井太郎）は、1917（大正6）年からわずか1年あまりですが、鳥羽に住み、造船所で働いていました。

乱歩は1894（明治27）年、今の三重県名張市に生まれました。小学生の時から冒険小説が好きで、大学に進むと仲間とともに回覧雑誌を出したり、英語の小説を日本語にほんやくしたりしました。

造船所では会社の雑誌の編集をまか



乱歩が愛用していた品々。（「江戸川乱歩館」展示）

されました。また仲間と「鳥羽おとぎ倶楽部」をつくり、学校をまわってお話をして、子ども



鳥羽に住んでいたころの乱歩（中央）と岩田準一（左）。

たちをよろこばせました。さらに地元みんぞくの民俗研究家の岩田準一じゅんいちや、のちに妻となる坂手島出身の教師・村山隆子きょうしと出会いました。

1926（大正15）年から雑誌に連載した「パノラマ島奇譚」は、鳥羽の相島（今のミキモト真珠島）が舞台のモデルという説があります。『怪人二十面相』をはじめ、乱歩の数々の推理小説は、今でもたくさんの大人や子どもたちに愛読されています。

江戸川乱歩の「少年探偵団」の本を、読んだことがあるよ。



小説家・江戸川乱歩と妻の隆子。

び じゅつ みんぞくちよう さ ちよさく
美術や文学、民俗調査の著作も残した

い わ た じ ゅ ん い ち
岩田 準一 (1900～1945)

鳥羽^{きゅう}の旧市街、大里通りに面して、「江戸川乱歩館」(鳥羽みなとまち文学館)があります。かつて岩田準一^{いわた じゅんいち}が住んでいた木造2階建て^{もくぞう}の家を、そのまま残したもので、江戸川乱歩の作品などのほか、準一の絵画や著作^{ちよさく}、交流のあった当時の名高い文化人からの手紙などが展示され、準一の書斎^{しよさい}が



準一の業績^{ぎようせき}が展示されている江戸川乱歩館。



民俗研究家・岩田準一。

再現^{さいげん}されています。

1900(明治33)年に鳥羽で生まれた準一は、小学生のころから絵が上手

で、東京の文化学院美術科^{びじゅつ}に進み、そこで美人画で有名な竹久夢二^{たけひさゆめじ}に学びました。また、小説家の江戸川乱歩をはじめ、歌人の与謝野鉄幹・晶子^{よさの てっかん あきこ}夫妻、生物学者・民俗学者^{みんぞく}の南方熊楠^{みなかたくなぐす}など、さまざまな人物と知り合い、かれらのえいきょうを受けながら多くの才能^{さいのう}を發揮^{はつき}しました。

1929(昭和4)年、鳥羽にもどった準一は、郷土の民俗調査^{ちようさ}に力を注ぎました。1945(昭和20)年に45歳^{さい}の若さでこの世を去るまでに、『鳥羽志摩^{しま}の民俗』『志摩の海女』など、たくさん^{きちよう}の貴重な著作を残しました。



生家を改築した「江戸川乱歩館」(鳥羽市鳥羽2丁目5-2)。

鳥羽小学校に通った小説家

梶井 基次郎 (1901~1932)

鳥羽小学校は現在、堅神町にあります。旧校舎が1929（昭和4）年に建てられる前は、錦町（今の鳥羽3丁目）に校舎がありました。梶井基次郎は、この錦町の小学校に通い、1913（大正2）年に卒業しました。

基次郎は1901（明治34）年、大阪市に生まれました。10歳のとき、父が鳥羽造船所に転勤になり、家族そろって移り住み、小学校の5年生に転入したのです。鳥羽での生活はわずか3年間ほどでしたが、海で泳いだり、城山をかけまわったり、自然の中で健康的な少年時代を過ごしたようです。

その後、基次郎は代表作『檸檬』など、詩のような短い文章で表現したす



作家・梶井基次郎。

基次郎が住んでいた造船所の社宅は、旧NTTの辺りにありました。

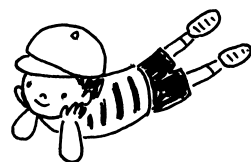


大正期の鳥羽造船所。

ぐれた短編を発表し、文学者としてみとめられ始めた時に、病気のため31歳の若さで亡くなりました。

鳥羽で過ごした子ども時代の思い出は、「海」という未完成の作品の中に、「そこは僕たちの家がほんのしばらくの間だけれども住んでいた土地なんだ。そこは有名な暗礁や島の多いところだ。その島の小学児童は毎朝勢ぞろいして一艘の船を仕立てて港の小学校へやって来る。」（角川文庫『檸檬』KADOKAWA刊より引用）などと書かれています。

鳥羽の海は、基次郎の思い出に残ったんだね



かみしま ぶ たい しおさい しっぴつ
神島を舞台に、小説『潮騒』を執筆した

み し ま ゆ き お
三島 由紀夫 (1925～1970)

かみしま しおさい
神島は「潮騒の島」といわれます。
1953（昭和28）年、三島由紀夫
（本名：平岡公威^{ひらおかきみたけ}）は春と夏の2回、神
島にやってきて約1か月間滞在し、島
の雄大なながめや、ゆたかな自然や海
のくらしをくわしく取材して『潮騒』
を書きました。漁師の青年と若い海女^{あま}
が、さまざまな困難を乗り越えて純愛^{じゅんあい}
をはぐくむ物語で、5度も映画になりました。

三島は1925（大正14）年、東京に生まれました。中・高校生のころから文学作品を発表し、大学卒業後は
大蔵省（今の財務省）につとめました
が1年足らずでやめて、作家となる道



『潮騒』を書くときに使った机（寺田さん宅）。



三島が滞在した寺田さんの家。



作家・三島由紀夫（左）。となりは、三島を宿泊させていた当時の漁業組合長の寺田宗一さん。

を選びます。よく年、小説『仮面の告白』^{かめんのかくはく}を出版して作家としての地位を確かなものにしました。

『潮騒』は、ベストセラーになってすぐに映画化され、第1回新潮社文学賞を受賞した評価の高い作品です。三島はその後も『金閣寺』などの作品を発表し、戦後の日本文学を代表する作家の一人となり、海外でも広くみとめられました。1970（昭和45）年、45歳で亡くなり、たくさんの人々に才能をおしまれました。